

〔躬恒集〕雨の降日人に送る

衣手のけさはぬれたる思ひねの夢。ち。にさへや雨のふるらん

〔源氏物語御法四十〕御をくりの女房は、まして夢路にまどふ心ちして、くるまよりもまろびおちぬべきをぞ、もてあつかひける、

〔古今和歌集戀十二〕寛平御時、きさいの宮の歌合のうた、
藤原としゆきの朝臣

住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひぢ。人めよくらん

〔倭訓栞前編三十五〕ゆめ。の。た。ち。夢の直路也

見しはなほ夢のたち。ち。にまがひつ、昔は遠く人はかへらず、菅家万葉集には、夢の只徑と書

り。

〔躬恒集〕はじめて

あはぬよもあふよもまさしいをねらば夢のたち。ちはなれやしぬらん

〔古今和歌集戀十二〕寛平御時、きさいの宮の歌合のうた、
藤原としゆきの朝臣

戀わびて打ぬるなかに行かよふ夢のたち。ちはうつ、ならなん

〔新拾遺和歌集九〕羈中夢
前大僧正實超

古郷にかよふた。ちはゆるされん旅ねの夜半の夢の。關。守。

〔倭訓栞前編三十五〕ゆめ。の。う。き。は。し。源氏卷の名より始れり、夢浮橋也、夢よりうつ、現より夢

と情の相通ふをいふといへり、

〔河海抄夢浮橋二十〕爰に此卷を夢浮橋と題する事詞にもみえず、歌にもなし、古來の不審なり、凡夢の

うきはしとつ。けたる事、是よりはじまれり、略中眞實の義は夢の一字の外に別の心なし、浮橋

は夢にひかれて出来詞なり、凡當流の義は、諸事やすきを以て正説とするゆへ也、されば本歌の